



Title	彙報
Author(s)	
Citation	懷徳. 1925, 3, p. 60-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

彙報

△懷德堂記念會記事

○理事會 自大正十三年一月
至同十四年四月

(大正十三年)二月十三日開會、議事要項如左

- 一、校印論語義疏ニ關スル件一、懷德堂考出版
- ニ關スル件一、基金増募ノ件一、書庫研究室講
- 師寢室建造ノ件一、借地願ノ件

四月九日開會、議事要項如左

- 一、大正十二年度歳入歳出豫算決算對照表同收
- 支決算總計表並同十三年度歳入歳出豫算案一、
- 懷德堂講演集發行ノ件一、懷德堂考出版ノ件
- 一、評議員補缺ノ件一、常任理事ノ件一、物故
- 講師合祀ノ件

六月十六日開會、議事要項如左

- 一、十月恒祭ニ關スル件一、物故講師神位並祭
- 典形式ニ關スル件一、評議員補缺推薦ノ件一、
- 懷德堂二百年記念並懷德堂記念會十年記念事業
- ニ關スル件

八月三日開會、議事要項如左

- 一、故西村講師兼評議員追悼祭並告別式ニ關スル件

九月三日開會、議事要項如左

- 一、十月恒祭ニ關スル件一、物故講師神位ノ件
- 一、評議員補缺推薦ノ件一、書庫研究室建造地
- 域ニ關スル件一、懷德堂考出版ノ件一、堂友會
- 追悼祭廣告費補助ノ件一、故西村講師記念事業
- ノ件一、碩園博士追悼錄ニ關スル件

十月三十日開會、議事要項如左

- 一、故西村講師記念事業ノ件一、在阪故西村博
- 士親友相談會ニ關スル件一、懷德堂講演集出版
- 契約書案

十二月十二日開會、議事要項如左

- 一、東山春宴日時ノ件一、堂友會員慰勞ノ件
- 一、故西村博士記念會要項追加ノ件一、懷德堂
- 二百年記念祭執行時期ニ關スル件一、夏期講習
- ヲ開ク件

(大正十四年)四月三十日開會、議事要項如左

- 一、大正十三年度歳入歳出豫算決算對照表同收

支決算總計算表並大正十四年度歳入歳出豫算案

一、懷德堂二百年懷德堂記念會十周年記念事業

ニ關スル件一、書庫研究室建造ニ關スル件一、

夏季講習ニ關スル件一、故西村博士記念會締切

期限延期ノ件

○懷德堂考の重印 故西村碩園先生の名著懷德堂考は曾て朝日新聞紙上に連載せられし外、刊本として世に弘く流布せざりしかば、其の重印を望む人多かりしが、近く懷德堂に於て五百部を限り重印することゝなれり。末尾に懷德堂復興小史として懷德堂記念會の記録を抄録して之を附録し、尙ほ首に珂羅版二十三葉を附する外、黄裳中井先生の懷德堂年譜を附印することなれば、讀者の便宜大なるものあるべし。

○懷德堂記念會圖書分類目錄 大正五年懷德堂重建の當時、僅々一二十部の寄贈書あるに止まりしが、粉山衣洲翁の物故するや、其の水壺軒藏書五百餘部七千餘冊愛甲兼達氏の有に歸し、氏は之を懷德堂に寄託せらる。尋いで四部叢刊の印行せらるるや、勝本忠兵衛小食正恒南郷三郎三氏の捐資に依りて、其

中二十四史を除くの外三百十九部二千七十四冊を購入することを得たり。同十年、講師西村博士の宮府に徵用せらるるや、行るに臨みて、皇朝諸書類百餘部二百四十餘冊を寄贈せらる。斯くの如くにして、現に堂に藏するところの書、寄託書を合せて千百餘部約一萬一千冊を算するに至れり。昨年七月より之が分類目錄を製することに着手し、聽講生今川せい子教授の指導を受けて、専ら事に當り、今や略ぼ經史子三部を畢れり。

○書庫並研究室の建造 豫ねて懷德堂に書庫並研究室建造の計畫ありしが、今回故西村博士記念會の發起により、碩園先生舊藏の書全部の懷德堂に寄贈せらるるに至りしを以て、堂に鄰接して借地の東北隅に於て、愈々近く建造に着手することなれりといふ。

○懷德堂講演集の發行 本年より毎年一回若くは數回懷德堂講演集の發刊せらるることとなり、已に東京弘道館より發行せらる。而して定期講演は懷德堂文科學術講演集、通俗講演は懷德堂百科通俗講演集と名づけ、各別に出でたり。

○夏季講習會 八月初旬、懷德堂 に於て、約一週間支那學に關する夏季講習會の開かる講師は東北帝國大學 法文學部教授 文學士武内義雄（老子概説）、文學士石濱純太郎（敦煌石室遺書に就いて）、大阪高等學校教授文學士財津愛象（楚辭と漢賦）の諸先生なり。

○吉田講師の歸朝 豫ねて支那留學中の吉田講師は去る六月五日留學の期滿つると共に歸朝の途に就き天津より海路神戸に上陸、十二日池田に歸着せられたり。

△懷德堂友會記事

○第一號本會記事補遺

そも／＼本會の起るに至りし因由は、大正十二年三月廿九日茶話會の席上に於て、教授松山先生より「懷德堂聽講生に名を列ねし人も、今は七八百名の多きを算ふるに至りたれば、此等同志の人々より成る切磋親睦を圖る會を組織しては何如」と御話ありしに端を發しぬ。爾來聽講生の間に議論漸く熟し、同十二年六月會則を定め趣意書を草し、

會て定日講義定期講演の聽講者たりし人々並に現に定日講義文科講義定期講演を聽ける人々等に向つて、發起人飯島溜三郎岡田玄碩中川幸三井上正美野口幸雄太田勘兵衛山本檜信小沼量平小松熊之助青木潤坂田廣吉平野得三の名を以て趣意書並會則を發送して、其賛同を求めしに、乍らにして七十餘名の賛成を得、十月恒祭の日を以て發會式を舉ぐべく準備しつつありしに、九月に至りてかの曠古の大震災あり、之がために恒祭もやうやく十一月四日に執行せられ、同日を以て發會式を舉ぐるを得るに至りたり。

○記事

（自大正十三年一月至同年三月）

大正十三年一月十七日（第三本曜）講義終了後、定例幹事會を開く。松山會長臨席、會報發行に關する件、冬季茶話會期日の件を協議し、十時散會せり。同年二月七日（第一本曜）講義終了後、定例幹事會を開く。松山會長臨席。來十一日紀元節の佳辰を以て、冬季茶話會を開くべくに付、其準備に關する件、中井木菴鷹氏を名譽會員に推薦の件を議決し、且つ茶話會の節、中井履軒先生の遺著七經逢原七經影題

畧を陳列し、會員に展覽せしむることとし、右借用方を小沼幹事を以て、中井家へ申込むこととせり。

二月十一日冬季茶話會開會、第一號に記事あり。

三月二十一日春季探勝會第一號に記事あり。

三月二十四日(月曜)聽講後九時より臨事幹事會を開き松山會長以下出席二三當面の要件を決議せり。

五月十二日(月曜)午後六時より臨時幹事會を開く松山會長稻東名譽會員も臨席し、會報發行に關し協議せり。

七月二十三日(水曜)午後一時より幹事會開會。松山會長以下 幹事及堂友 野口幸雄出席。會誌送附の件、次號編輯準備の件、夏季茶話會の日時及討論題目の件、中江藤樹遺跡訪古の件、會誌寄贈範圍の件を議定せし後、幹事等は會誌發送の準備を了し、尙茶話會の通知を發送せり。午後九時散會。

七月二十七日(日曜)夜七時より幹事會開會、松山會長以下出席。懷德第二號に初號正誤表を載すること、幹事中に編輯主任を定むること、堂友會趣意書並會則を次號に掲載すること、堂友會發企より成立に至るまでの経過を載すること等を議決す。

七月三十日明治天皇祭日夜七時より夏季茶話會を大講堂に開く。名譽會員稻東、財津兩先生以下會員四十三名齊集し、『儒教の將來に就て』各自所見を吐露すべかりし豫定なりしが、折柄講師名譽會員西村碩園先生東京に於て遠逝の訃音に接したるを以て、會長松山先生は俄に上京せられたれば出席なく、隨て今晚は西村先生に對する懷舊談を以て互に弔意を表することとし、稻東、財津兩先生其他會員の懷舊談ありて、十時散會せり。

九月八日(月曜)幹事會開會、松山會長以下幹事、野口會員出席、碩園先生追悼録を懷德臨時號として出すことを議決し、會長の名を以て寄稿依頼狀を各方面に發送のことに定め、依頼狀認め方を野口、平野、中川、小沼五會員に會長より依頼あり尙野口、井上、山本、中川、四會員に幹事の事を助くるやう依頼あり。

十月二日(木曜)講義後幹事會開會、松山會長以下出席。小沼幹事病氣の爲め缺席。來五日懷德堂記念恒祭に於ける會員の諸係分擔並に主任を定め、會長より依頼あり。

十一月一日（土曜）幹事會開會、故西村先生追悼號原稿蒐集の件につき打合せ。

十一月六日（木曜）幹事會開會、秋季探勝會の期日を決定し、通知狀を發送す。

十一月二十三日（日曜新嘗祭日）秋季探勝會舉行。觀心寺、延命寺を觀覽す。記事別項にあり。

十二月四日（木曜）講義後幹事會開會、松山會長以下幹事の外、野口、井上、山本、中川、今川諸會員出席。平野幹事缺席。會長より追悼録編輯に關する經過の報告あり、内容目次を示して意見を徵せらる尙荒木京大總長追憶談聽取方、寄附金受領方、寄稿者身分取調方等につき會員に依囑あり。

十二月十八日（木曜）講義後茶話會開會。松山教授以下聽講生二十一名出席。普代會員の歐米漫遊談あり。

十二月二十三日（火曜）幹事會開會、松山會長以下出席。追悼録贈呈の範圍其他數件を議定し、尙會長より故西村博士記念會醜金依頼者名簿調製方並に依頼狀名宛認方につき小沼、野口、平野、中川、山本五會員に依囑あり。

大正十四一月十五日（水曜）講義後定例幹事會開會松山會長以下幹事並に野口、中川、山本諸會員出席追悼録増刷の議出で居りしも、増刷せざることに決定し、尙堂友會費並に會報度數等につき、種々意見出でしも、決するところなく、各自立案の上更に審議し、原案を定め、之を總會に諮ることに決す。

二月八日（日曜）幹事會開會、松山會長以下幹事（太田、飯島缺席）の外、野口、中川、山本出席。來十五日冬季茶話會の次第を定め、石菴、蘭洲、莖菴、履軒四先生の遺墨を陳列することを決し、通知狀發送の準備をなす、是日追悼録成る。皆協力包裝、並に宛名記入の事に従ふ。

同月九日（月曜）岡田、野口、山本、中川、平野、太田等の諸會員登堂。追悼録包裝並宛名記入の事を了す、夜半退散。

同月十五日（日曜）冬季茶話會開會、記事別項にあり。

三月五日（木曜）定例幹事會開會、松山會長以下岡田、太田、山本三幹事平野會員出席、野口、小沼兩幹事缺席、會報懷徳は一年四月、七月、十一月の三

回發行することとし、其内容は堂の事業を成るべく詳細に報ずるを主眼とし、講演は其要旨を、講義は其の一部分を載するやうにしては如何との會長の意見あり、第三號は千賀博士の『國體の擁護』を載せ成るべく四月に出すことを決し、春季探勝會の日時を定め、場所は幹事の選定に委ぬることに決す、尙會長より會報發行の經費補填の方法につきて意見を述べらる。

三月二十一日（土曜）春季探勝會舉行、記事別項にあり。

△懷德堂同人會近況

懷德堂同人會は懷德堂聽講生有志の組織に係り、日曜朝講の後、同人相集りて輪講の會を開くものにして、大正十年九月石井宗一、山本檜信、高砂清七、黒田久春等の主唱發企するところなり。毎講必ず教授または講師の臨席を仰ぎ、疑義を質すを常とす。初め論語を講せしが、後古今の名文數十篇を選讀し嗣いで會國藩の經史百家簡編に移り、其の全部を了し、今は唐文評註讀本を用ひて、己に數十篇を終れ

り。毎回出席するもの僅に數人に過ぎざるも、回を重ねること己に百二十有餘回に達せり。山本檜信、中川幸三、不破重三、河野清光、今川せい子等によりて持續せられ居れり。

△名譽會員並新入會員

文學博士高瀬武次郎、文學博士鈴木虎雄兩先生は、何れも本會名譽會員たることを快諾せられたり。左記二君は何れも新たに本會に入會せられたり。

稲田 穰 久保田 昇

△會員消息

會員三宅春陽君は今回官命に據り、歐米見學旅行の爲め、近日發程の由。舊會員高砂清七君曩きに疾を獲、専ら療養に力め、一時その全快を報せられしに、去る二月十二日病勢遽に革まり、溘焉として逝けり。君學を好み、將來身を學問に委ぬるを決し、疾癒ゆるを待ちて、大東文化學院に入らんと欲し、準備おさ／＼怠なかりしといふ。年僅かに二十三歳。惜むべし。

△春季探勝會

大正十四年三月二十一日春季皇靈祭日を以て探勝會を催す。此の日好晴、午前八時三十分湊町驛に集合せしもの松山會長以下十六人。八時四十七分同驛發五條行列車に乗込み大和國北葛城郡當麻村に向ふ。これ二上山當麻寺を觀覽せんが爲めなり。十時四分下田驛に下車し、西南方に向て田圃道を行くこと二十五丁にして、當麻寺に達す。此寺は役行者小角が佛法興隆最初の靈地にして、天武天皇御宇白鳳年中に七堂伽藍を建立して、勅願所となし玉ふ。其後孝德天皇御宇、横佩右大臣藤原豐成の女中將姫が天平寶字七年に大誓願を起して當寺に入り、剃髮して法如丘尼と稱し、苦業を積みし功德にて彌陀の靈威を得、藕絲を以て織上げたりと云ふ淨土九品大曼荼羅に因りて其名顯はれたり。本坊奥院の住職權僧正森井察開師は一行を牡丹の間に（一に淀君御化粧の間といひ、桃山の聚樂第より移したるものと云ふ）迎へられて茶を饗せられたれば、携帶せる行厨を開きて中食を濟まし、それより森井僧正に導かれて講

堂に至り、縁起を聽聞し、書院に至りて國寶を拜觀す。法然上人行狀繪卷（土佐吉光外數人の筆にして、詞書は伏見、後伏見、後一條諸帝の宸翰に係る、智恩院のものと共に四十八卷御傳と稱して、世に喧傳せらる）當麻寺繪縁起三卷（土佐光茂の筆詞書は後奈良天皇の宸翰を初め、尊鎮親王外七人の筆に係る）其他何れも希世の珍寶なり。夫れより曼荼羅堂（本堂なり）金堂東塔西塔鐘樓等を巡覽せしに、堂塔はみな特別保護建造物にして、建築學専門家なごの見逃がすべからざる參考資料なり。奥院には聚樂第より移したる牡丹の間あるに因み、當住森井僧正が紅白紫黃各種の牡丹數百株を境内に栽培せしを以て、花時には頗る盛觀なるべし。午後三時寺を辭し、歸路は健脚家は二上山を越えて河内の磯長に出で、太子口より電車に乗りたるものあり。松山會長外數名は元の途を還りて、下田驛四時十六分發の汽車にて歸阪せり。